

氏名(本籍)	佐藤幸也 (宮城県)
学位の種類	博士(情報科学)
学位記番号	情博第87号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科, 専攻	東北大学大学院情報科学研究科(博士課程)人間社会情報科学専攻
学位論文題目	変動期東北農村におけるリーダーの農本主義イデオロギー思想の受容とその展開 -菅原兵治の農民育成及び農村経営論受容のあり方を通して-
論文審査委員	(主査) 東北大学教授 細谷 昂 東北大学教授 阿部 四郎 東北大学助教授 小林 一穂 東北大学助教授 添谷 育志 東北大学助教授 新川 達郎

## 論文内容要旨

本論文は、昭和期の有力なイデオロギーであった農本(主義)思想が東北農村に与えた影響を、菅原兵治と、彼を中心にした組織、及びその運動形態、また彼に学び、地域レベルで継承発展させた農村リーダーと彼等とともに活動した生産農民の軌跡を分析し、考察したものである。

昭和期農本(主義)思想は、一部に、その思想が継承されてはいるものの、戦後は歴史の表舞台から退き、学問的には否定的評価が一般的となっている<sup>1</sup>。丸山真男は、「日本ファシズム・イデオロギー的特質としてが非常に優位」<sup>2</sup>と指摘し、石田雄も同様の見解を示している<sup>3</sup>。また、大内力は、農本主義には「反資本主義的でもあるが、反社会主義的でもある性格は、農民を民族の根源だとする農本主義がまつわり」<sup>4</sup>、「農民の中間的な性格が、かれらに本来つきものの保守性や、狭い郷土意識に発した偏狭な愛国主義と結びつくとき、それは右翼思想を受け入れ、また育てる恰好の地盤」<sup>5</sup>となる、と農民運動が右傾化して行ったことの内在的問題点や農村と軍部との関係につながる視点を示す踏み込んだ分析をしているが、農村レベルでの実証的研究は森武磨<sup>6</sup>や高橋泰隆<sup>7</sup>、東敏雄<sup>8</sup>等がある。

一方、個々の農本主義者の思想や行動分析から農本(主義)思想の積極的な面を評価しようという研究が、綱沢満昭、滝沢誠等によってなされている<sup>9</sup>。

しかし丸山や石田は、金鶏学院について権力的分析を試みているにもかかわらず、農本(主義)的思想の中心を勤めた菅原については一言も述べられていない。最も重要な研究対象であるにもかかわらず、わずかに、田原音和<sup>10</sup>、菅原正<sup>11</sup>が言及しているに過ぎない。その意味で、菅原及び彼の周辺を分析することは、思想史的、政治学的、歴史学的にも寄与する社会学的、教育学的研究であり、近代日本の農民の思想や行動を明らかにする一助となる。

さて、昭和期の代表的農本(主義)思想家である菅原兵治は、日本国民としての本分を尽くす実践場として農村・農業を捉え、そこに住む人々に存在根拠を与えた。彼は、所謂「右翼テロ」の御用理論となった権藤成卿の思想や、国策と直結「満州開拓移民」のイデオロギーになった加藤完治等とは一線を画している。農本(主義)思想が一般的に持つ反地主、反資本を前面に押し出す事なく、むしろそれらとの協調路線を保ちながら、荒廃した農村の立て直しと再編を主張し、代表的農本(主義)思想官僚の横井時敬と同じようにその担い手を上層農民に求めた。そして菅原は、家、

地域、国、企業等の位相の中に自己を位置づけていくことを目的とし、人間形成の指導理念、方法概念に農本（主義）思想の衣をまとい、日本は「天皇が治める天壤無窮の農が大本なる国」であり、文化、教学の土壌は、古代以来農村にあるとして、戦前は日本農士学校、篤農協会を、戦後は庄内の東北農家研究所（後東北振興研修所）を基点に、多くの技術者を始めとするスタッフを抱え、教学を根本に据え、それぞれの場に応じた人間のあり方を、特に農村の指導者層や農民に説いた。彼は今日でも近代日本の大衆化に警鐘をならし続ける師として、また「道」の実践的指導者として企業や自治体幹部にも広く支持されている。

しかし、国家レベルのダイナミズムと村落レベルの動きを比較するとき、農村の変革は、確かに国策の大きな力が働いているとしても、実際上の選択は、ほかならぬ農民自身によってなされ、それは村落そのものの集団的組織的变化として現れる。その意味で、先にも述べたように、戦後の農村発展の具体像も含め、どの様に農本（主義）思想が生きたのか、また歴史的推進力として機能したのか、ということや、生産農民、なかんずく農村指導者層にどのように受け入れられたのか、という事に関する実証的研究は不十分である。

そこで本論文では、戦後も日本の農村社会に広い影響力を保持して来た菅原兵治と金鶏学院（日本農士学校）の性格や歴史的役割を明らかにした上で、これらから直接指導を受けた典型的農村の事例について分析した。

一つは、昭和恐慌下の宮城県栗原郡志波姫村（現町）である。志波姫村は、大地主である鈴木家（中心人物）のイニシャティブによって、在村の中小地主や自作上農層（中堅人物）が緊密な連携と協力体制を作り上げ、経済更生運動や産業組合運動などを繰り広げ、模範農村と称される存在であった。鈴木の実業家的合理主義と、それを支えた菅原仁志の実務的能力は、中小地主の他、生産農民をも一元的に組織化し、稀に見る翼賛体制（通称「翼賛村」）を実現した。この農村の指導理念（正当性の原理）と指導方法、指導者を、鈴木は菅原兵治に求めたのである。

鈴木は、菅原兵治の教学（農本（主義）思想）を村民に浸透させるため、尋常小学校及び高等小学校の統廃合、農業補習学校、青年訓練所の統合と青年団体の合体を実施し（通称志波姫公民学校、後に日本で最も早く体制を整備した志波姫青年学校）、更に村長が学校長、農会長、産業組合長を兼務し、権力を集中することで、経済更生運動と農村再建を果たした。中心人物たる鈴木は、極めて政治的に菅原兵治の思想や組織を活用した。その下で菅原兵治の思想を人生や地域作りの指針にしたのは、鈴木をサポートした菅原仁志や青年団活動に係わった所謂中堅人物、または中小地主、自作上農層であった。そして小作農民さえも、この活動に積極的に参加できる状況が作り上げられていた。生産農民側の実利的理由もあげられるが、菅原の指導理念が村民に一定理解され、それが翼賛体制に結び付いて行ったものである。そして、志波姫の活動は、栗原郡全体に影響を及ぼし、菅原の思想の一大拠点となった。戦後構想された「東北治郷学院」は、志波姫でなければ出来ない事であった。

加藤完治の満州移民をリードした農本（主義）思想は、日本の侵略戦争を正当化するイデオロギーとしての役割を果たしたが、菅原のそれは、この時代にあって、農民運動を抑え、階級意識を眠り込ませ、現体制に盲目的に精勤する農民意識の醸成と村落秩序を維持する正統的イデオロギーとして大きな役割を果たした。その意味で、庄内庄柏会は例外として、志波姫村は、ともに菅原兵治の戦前における理念を最も純粋に実現した事例である。

二つ目は、戦後農地改革によって自作農体制を迎えた宮城県加美郡宮崎町（旧賀美石村）である。賀美石村は自小作、小作が中心の小村であった。そのため、農地改革により自作化した農民の生産意欲は高く、地主支配の軛から解放されて、青年層を中心に「新しい村づくり」に取り組んだ。

しかし、村民は、戦争による働き手の喪失、物資不足という現実に混乱を極めていた。そこで彼らは、生き方の指針を菅原兵治に指導を仰いだ。また、町政レベルにおいても歴代の町長助役を始め役場や農協などの主だった幹部はほとんど直接指導を受け、産業、民生、教育全般にわたり町政を運営して来た。中でも佐藤清夫氏が中心となった本郷部落（本郷農事研究会）は、その先頭に立ち、宮崎町のみならず加美郡の農業や生産改善、農村文化、教育運動などをリードしてきた。

佐藤清夫は、頻りに庄内を訪れ、菅原兵治や松伯会などの勉強会に参加し、直接指導を請い、本郷農事研究会の仲間と実践した。そこには、菅原兵治が当時考えていたことや指導していた内容が直接的に反映されている。町当局や農協関係者は、この佐藤清夫の活動や思想に動かされて、農業の発展政策と地域作りにかかわっていく。菅原兵治は、戦後庄内で活動し続けたのであるが、彼の思想を戦後最もピュアな形で体現したのが宮崎町である。

しかし、本郷農事研究会は、米の生産調整（減反）政策が始まって事実上活動を停止し、宮崎町の「耕心会」（菅原

の思想を町民に普及する団体)も世代交替と、菅原の教えを直接受けた町の幹部が引退するにつれ、親睦団体化している。つまり、旧世代の退場と農業が町の基幹産業としての地位を相対的に低下させるに伴って、菅原の思想的受け皿が消え去ろうとしているのである。菅原によって創設、発展させられて来た東北振興研修所も、今や企業研修機関にシフトし、安岡と菅原双方のエッセンスを教学として継承しているのが現実である。

それでも、戦前から戦後50年の長きにわたり、村作り、そして村の人材育成に影響力を保持し続けて来た意味は大きい。菅原の農本(主義)思想は、皇国農村建設から、戦後復興と豊かな村作りへと標識のつけ変えが行われたが、基本線は継続している。むしろ、戦後の自作農体制に適合的な思想ともなっていた。それは、農地改革の結果、農村が戦前レベルで言えば上層農という広範な生産農民秩序の村に生まれ変わったからであり、それだけ菅原の思想の受け手が広がった、とも言えるからである。生産力の上昇を基礎としながら、それに見合う精神構造のあり方を常に強調した菅原の思想は、貧しい時は清貧の思想、経済力が上昇すれば礼節の思想と、自在に変容しながら農民の心をとらえていった。

ところで、技術面での指導は、菅原の部下が組織的実践的に担当したが、教養主義の強い菅原兵治の思想を、一般の生産農民が理解するのは容易なことではない。そこで、重要なのが部落乃至村落のリーダー層の存在である。「結い」に代表される村落共同体が、生産と生活の両面を支える器であり、たとえ村民が菅原の思想を十分理解していなくても、リーダーの行動、指導力こそがものを言う。

換言すれば、有機体的村落の性格、発展動向はリーダー層によって大きく左右されるのである。特に、時代における社会変動がドラスティックであればあるほど、その影響力は大きい。そこで、菅原兵治の思想や、それを農村がどのように受け止め、活力にしていっていったのかを分析するには、リーダー層とその集団構成員の活動を詳しく見るのが有効であり、本論文では、この点を重点的に実証した。

志波姫、宮崎両村は菅原の思想を典型的に実践で示していた。融通無碍に見える菅原の思想は、激動期の村落体制を前進させる作用力を確かに果たして来た。結論的に言えば、昭和期の農本(主義)思想の中でも、独自の路線を歩んで来た菅原のそれは、家族経営を基盤とする小農体制が、経済的脆弱性と国際的競争原理、資本の原理に蹂躪されつつも、そこに自信と誇りを見いだしながら望ましい農業経営や、労働のあり方、生活そのものの見直しを含め、現状を踏み越えていく可能性を探り、生産力の上昇を現実的至上命題としつつ、混乱と悩み多き農村社会でリーダーの役割を担わなければならなかった農民たちに、生きる指針を与え、歴史の推進者になれるようなアイデンティティーの形成を促したものであった。

注

- 1 金原左門、竹前英治編『昭和史』増補版有斐閣選書 1982 増補版初版1989  
藤田省三 『第二版 天皇制国家の支配原理』未来社 1966  
神島二郎 『近代日本の精神構造』岩波 1961等
- 2 丸山真男 『日本フォシズムの思想と運動』『現代政治の思想と行動』未来社 1964 p44
- 3 石田 雄 『近代日本政治構造の研究』1956
- 4 大内力著 『日本の歴史24 ファシズムへの道』中公パックス 中央公論社 1984 p217 なお、高橋泰隆『昭和前期の農村と満州移民』で農本主義について同様の見解を示している。吉川弘文館 平成9年
- 5 同前
- 6 森武麿「太平洋戦争下のくらし」同『昭和史』増補版 金原左門、竹前英治編  
有斐閣選書 1982 増補版初版1989より p157-185  
森武麿『地域における戦時と戦後』日本経済評論社 1996
- 7 高橋泰隆『昭和前期の農村と満州移民』吉川弘文館 平成9年
- 8 東敏雄『勤労農民の経営と国家主義運動』御茶の水書房 1987
- 9 これらには  
久保隆 『権藤成卿論』 JCA出版 1987  
網沢満昭『農本主義と天皇制』イザラ書房 1974『農本主義と近代』風媒社会 1979  
『日本の農本主義』紀伊国屋書店 1971  
滝沢誠 『権藤成卿』紀伊国屋書店 1971

松沢哲成『橋孝三郎』 三一書房 1972

斎藤之男『日本農本主義研究－橋孝三郎の思想－』農産漁村文化協会1976等

また、岩崎正弥「農本思想の社会史－生活と国体の交錯－」 京都大学学術出版会1997は、最新の研究として注目される。

10 田原，菅野，細谷著『東北農民の思想と行動』御茶の水書房 1984

11 菅野正 『農民支配の社会学』 1992

## 審査結果の要旨

菅原兵治は、戦時期から戦後期にかけて活躍した農本（主義）思想家である。農本（主義）思想については、これまでその思想内容や、とくに戦時期にはたした役割から、否定的に評価されることが多かった。それはおそらく正しいであろう。しかし近年、その思想内容についての評価はそれとして、農本（主義）思想が農村社会の構造と変動にとって果たした役割を地域社会研究の観点から解明しようとする動向があらわれている。本論文は、そのような新しい研究動向に即しながら、農本（主義）思想のいくつかのタイプのなかでもとくに菅原兵治をとりあげて、その思想と役割の独自性に照明をあたえようとするものである。序章と結語を含め5章からなる。

序章においては、本論文の課題を提起している。

第1章では、菅原兵治の農本（主義）思想の中軸を「農士」の概念にみだし、その形成と伝播にかかわった諸組織の分析をおこなっている。

第2章では、戦時期の宮城県栗原郡志波姫村において、菅原兵治の思想が当時の村長の思想と行動、およびその指導下にあった青年運動に浸透し、全国的にも「模範」的な翼賛体制構築の原動力になったことが論定されている。

第3章では、戦後期の宮城県加美郡宮崎町において、菅原の思想が青年層の農事研究会を鼓舞し、農地改革後の農業生産力発展、地域づくりにおおきな役割をはたしたことを解明している。

これら第2、3章におけるモノグラフは、綿密な資料収集の上に、時代背景、地域の産業構造、支配構造等のなかに位置づけて課題をとらえ、菅原の思想が果たした役割を地域社会の特性との関連で解明することに成功しており、地域社会研究としてすぐれた成果となっている。

結語は、以上の分析のまとめである。

本研究において示された菅原兵治の思想の特質は、「農」と「士」とを「義」の観念によって結合する、きわめて抽象的な理念にあるが、しかしそれにもかかわらず、否むしろそれ故に、篤農家などの農業技術の伝承と結合することによって、現場の農民たちに強い浸透力をもったこと、その際には町長、青年運動のリーダーなど、村の現場における指導層にまず影響をあたえ、かれらの思想と行動を通して一般の農民に浸透していったこと、またこのような思想的特徴が、戦時期のみならず戦後期にも影響力を残しうる根拠となったこと、が明らかにされている。以上のように本研究は、地域社会研究の分野に貢献するとともに、地域における思想伝播と影響のメカニズムを解明した点で地域情報過程の分析として重要な示唆をあたえたものと評価することができる。

よって、本論文を博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。